

公開講演会

在日コリアン史の文脈とキリスト教宣教*

講演者：李仁夏（在日大韓基督教川崎教会名誉牧師）

日時：2000年2月17日（9:50-12:20）

場所：本館 262

日本の朝鮮植民地支配の過程で、当初は留学か、労働力としてのコリアン人口の移住が始まり、1945年には230万を越えた。その多くは、戦後、帰還したが、日本の排除政策と祖国分断と戦争等により、今は社会的少数者として60万位である。その質的変容は大きく、四世代を重ね、特別永住者と韓国のニューカムーズによって構成されている。外に21万を越える日本国籍取得者がいる。

キリスト教宣教は、1907年の留学生YMCA運動から始まり、母国教会宣教師派遣を受けて、教会形成も始まった。YMCAに集う留学生は、当時の民族自決の世界潮流に触発され、1919年二・八朝鮮独立宣言を発表し、三・一独立運動の烽火と記録された。1927年、カナダ長老教会 (The Presbyterian Church in Canada) 派遣宣教師に助けられ、1934年、教会・伝道所45を束ね、母国教派から独立した在日朝鮮基督教会を創立し、それは信徒 4,000、児童数を加えると5,000を越えた。あるアメリカ宣教師は「貧しい中を堪え、柔和で親しめる人々だ」と絶賛した。

しかし、大戦前の皇民化政策により、民族教会の存立を許されず、1940年、日本基督教会、翌年、日本基督教団に統合された。第二次大戦中は多くの教職者が投獄され、受難の時代を迎えた。

神の摂理か、戦後、多くのキリスト者の帰国する中、約300名が散らされた群を集め、1948年には在日大韓基督教会 (The Korean Christian Church in Japan) を再

建した。1968年、宣教60周年を記念し、宣教基本政策を打ち出し、日本と世界教会とエキュメニカルな交わりを深め、在日同胞への伝道と人権擁護運動に貢献し、小ながらも、全国80の教会と約6,000名の会員を数える。二、三世が中心を占め、日本人会衆もいて、礼拝は日韓両語である。ディアスポラの多文化状況でのアイデンティティーの問いを含めた、70年代からの「寄留者の神学 (A Theology of Sojourners)」も芽ばえ、世界の移民・難民の状況における宣教論として注目されている。

*2000年2月17日に開催された李仁夏氏の公開講演会は、「朝鮮植民地支配の歴史的文脈とキリスト教宣教」の演題で行われた。